



若者

助手になって2カ月半

大 鑄 史 男*

前略。

お元気ですか。ようやく春らしくなって来た様です。今年の冬は暖冬異変で、繊維業界は大打撃を受けたそうです。それにしても春は早いだろうと思っていたら、先日まではうすら寒く風をひいてしまいました。

2月から助手として勤めています。2月からということもあってそんなに大した仕事もなく、今までの所は院生の時と同じ様な生活パターンです。3月に入試があり、その監督をしました。昔は監督をされたのですが、立場が変わるとなんとなく変な気分です。「先生！」と呼ばれることも時々ありますが、こそばゆい感じで教官になったという実感はまだわいて来ません。

来週から講義が開始されます。助手としての本格的な仕事もはじまる様です。大きな仕事は卒業研究のめんどろを見ること、3年生の実習のめんどろを見ること、etc.です。卒業研究のめんどろを見るなんて、本当に自分にできるのかという不安でいっぱいです。質問が来たら答えられるのかしら、どんな本を読んでもらおうか、ゼミの時はどんな風に対応したらいいのかしら、などなど、やってみなければわからない様な不安が次から次へと出て来ます。でも最小限こんなことは思います。大学院に行く人もいるだろうけれど、やはり就職して行く人がほとんどだと思えます。就職したらそんなに腰をおちつけて勉強するという事もないだろうし、そんなことが出来るのは大学にいる間だけだと思います。そんなことから、4年一年間何か一つの事をきっちり勉強してもらえればと思います。私がどこまで力のかせるのかはわかりませんが、なにはともあれやってみなければな

にもわからないこと、このごろは極力不安をうしろにおいやって少しいなおり気味にかまえています。

もう一つ大きな不安があります。それは3年生の実習のめんどろを見るということ。この実習がなにであらう、電子計算機の実習であり、私は電子計算機は大きらいときている。プログラムを組むなんてのは何となくクイズみたいで、好きになれない。好きになれないでほっておくわけには行かないので、Fortranの本と、シミュレーションの本を買って来て、今眼の色をかえて勉強中です。なにしろ課題を出して、質問に応じなければならぬのですから、今まで計算機のいじったことのない私にとっては大なる恐怖であります。でも勉強してみても、Fortranそのものはおもしろくないけど、シミュレーションはおもしろいものだと思います。琵琶湖の温度変化をシミュレーションするなんてのは大きくていい。地球規模のシミュレーションなんてはさらにスケールが大きくていい。なんとなく自分の研究がこまかすぎて、スケールの点で見おとりする様な気もしましたが、いろんな人達が故障ということに対して曖昧に思っていることを概念的に完結化するという「困難」な仕事をしているのであり、決して見おとりはしないと自分で言いきかせています。

それにしてもこのごろ、工学研究というのはなんだろうかと思えます。物を創るにおいて直面するさまざまな現実的な問題を基本的に解決するのが工学研究の課題である様な気がします。それは創るということに密接なつながりを持っています。工学とは基本的にハードであるのでしょうか？ ならば工学におけるソフトの研究はどういう意味を持つのでしょうか？ ハードはソフトから影響を受けることはあるでしょう。しかし、ソフトはハードがあってこそ

* 大鑄史男 (Fumio OHI), 大阪大学, 工学部, 応用物理学科, 助手

ソフトであり、ハードに基礎を持っていないソフトはあり得ない様に思います。少なくとも従来の工学は生産（物を創る）ということにその存在基盤を持っていたと思います。それは現実的に使えるということです。数理工学という分野があります。私の研究分野がそこに含まれています。工学においては理論系と実験系があります。数理工学はその理論系であると言えばカッコイイのですが、あまり役に立たないということを知ります。従来の工学を生産工学という様な名前と呼ぶとすれば、数理工学は広い意味で管理工学と呼んでもいい様な気がします。それは最適化手法の開発を最大の課題とすると同時に、すでにある最適化手法を用いて、さまざまな意志決定の問題をモデル化し解析したりします。それらは常にどのような現実的応用があるのかが問われます。現実的な対応は常にあるのだが、あまり役に立たない。即時的な有用性を

問われてもそれに答えきれない所があります。工学は常に役に立たなければならないというイメージがあります。数理工学自体もそうでなければならないというイメージがあります。実際そうでなければならないのか？役に立つということの意味内容が問われます。現場における現実的で具体的な問題に答えるのが工学の一つの仕事であり、又現場におけるあいまいとした概念的な問題に答え、一つの方向をさし示して行くのも工学の課題ではないかと思われまふ。そういう風に見るならば、数理工学自体もそれなりの独自性と有効性を発揮できる様な気がします。これからの私自身の研究を通しての大きな課題でもあります。

働き始めて2カ月半ほどですが、その間に感じたことを書いてみました。今回はこれぐらいにしておきます。ジャ。

1978. 4. 10.